

(別紙 2)

審査の結果の要旨

氏名 石山 裕慈

本論文は中世の日本漢字音について、その声調に焦点を当てて検討し、中世日本における漢字音の日本語化の実態について論じたものである。

本論文は大きく三部に分かれる。まず第一部は四章からなり、日本漢字音のうち、呉音の声調について論ずる。第一章では呉音声調に関する従来の研究を概観し、第二章では親鸞の「観無量寿経註」「阿弥陀経註」を取り上げて、ここでは全ての漢字が音読されているながら（字音直読）、その声調が文脈を理解した解読の結果を反映していることを述べる。第三章では同じく親鸞の「三帖和讃」を検討し、その三字漢語の声調を調査して、「二字＋一字」の三字漢語の方が「一字＋二字」のものよりも、日本語化の度合いが高いとする。第四章では「四座講式」の十四世紀以後の諸本を対象として、そこに見られる漢字音の声調が時代が下るに従って「中低型回避」など、日本語のアクセントに影響された変化を進めて行くことを論じた。

次に第二部では漢音の声調について論ずる。第一章では漢音の声調に関する問題点の所在を確認し、第二章では中世の「論語」の訓点資料四本を取り上げ、そこに声調を示すために記入された声点の箇所や声調に大差がなく、その声調が中国の「經典釈文」に示されるところによく一致し、「論語」の日本漢音の声調があまり日本語化していないことを指摘する。第三章ではこれとは逆に鎌倉時代の「本朝文粹」の訓点に見られる声調が、しばしば日本語化していることを述べる。第四章では空海の著作「文鏡秘府論」の中世写本の漢音声調が、中国語音を忠実に反映している点のあることを論ずる。

第三部は二章からなり、漢字音声調の諸相を扱う。第一章では「世俗諺文」の鎌倉時代写本の漢音声調に通常と異なるものが多くあり、呉音の声調の知識に影響されたものであるとする。第二章では真言宗で所用の「補忘記」に示された声調が、日常的に用いられる漢語のそれとは異なり、儀式の場で唱えられる特殊なものであったことを主張している。

本論文は、日本漢字音の声調について、一方でそこに日本語の音韻体系の影響による日本語化の力が働きながら、他方では中国語音に関する知識や規範意識によってそれを抑制しようとする動きがあり、その両者が絡み合いながら全体としては日本語化の度合いを強めて行く実態を丹念に、また鮮やかに論じている。呉音資料としての「法華経」、漢音資料としての「孔雀経」などの資料群の検討を今後の課題として残してはいるが、従来やや低調であった日本漢字音の声調の研究の進展に寄与する独創性の高い論考であると評価される。よって本審査委員会は、全員一致で本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論に達した。